

□ 次の文章は思春期に悩む少女に筆者が手紙で答えるという形式になっています。これを読んで、後の一から十二までの各問いに答えなさい。なお、作問の関係上、一部省略した所があります。

(字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

挨拶をしなくなりたる少女いて成長とはかく黙すことなり

(嶋田武夫作)

「成長とはかく黙すことなり」と思春期から青年期への変化をあたたく、肯定的に受けとめようとする大人たちがちゃんといてくれるのに、そんな大人の存在も目に入らないほど、Kさん、今、あなたは自意識でふくれあがって、他人の目に自分がどう映るか、そればかりが気になっているかもしれません。髪がどういうスタイルにまとまっていようが、スカート丈がどうだろうが、歩き方がどうだろうが、そんなことには他人はほとんど誰も関心など払っていないというのに、当人だけはありもしない他人の目に全神経をはりつめて、対応しようとしている。いや少なくとも中学生の私はそうでした。容姿にまるで自信のなかった私でも、一日何回鏡を見たことでしょうか。思春期から青年期のこの自意識の、なんとやっかいなことか。

何もかもがぎくしゃくとうとうとうしくて、自分でも、挨拶ひとつ、なぜできないのかわからない。自分で自分をもてあまし、もう不機嫌に黙るよりほかなくなってしまう。多くの大人が自分自身のその頃の感覚を忘れて、挨拶ぐらいすればよいものを、と若い人たちをAせめ、

① 「には、②校區一丸となって挨拶運動まで始め、挨拶の強要へと向かう中で、成長とはかく黙すことなり」と詠む方に新聞の歌壇で出会ったとき、私は、③ああ、いらしてくださった、と心底嬉しくなったものです。中学生の頃にこの短歌に出会っていたら、どんなによかったかと思いましたが、でも、七〇代に入った今だって、④やっぱ嬉しい。というの、知らない小学生や中学生に大声で挨拶される度に、私は正直居心地の悪さを覚えていたからで、けれどこんなことを言ったら、いい歳をして、と笑われるでしょうか。でも、誤解しないでください。私が覚えるこの居心地の悪さは、たぶん黙すこ

とを許さない大人の仲間に自分が「否応なく」入れられて、若い人と向かい合わせられることからくるものです。

小さい声での挨拶ならいいの？ ええ、まだましです。そこには、かろうじて⑤その人がいてくれるから。でも、大声はつらい。当人が無理して自分を消しているような気がするからです。あるいはそうすることをすでに習慣にしまっているようにも見えることがある。

前に記した少女のようにわめくのもいい。仲良しの友だちと語らうのもいい。一人で黙々と歩くのもまたいい。せめて登下校の、誰の指示も受けずにいられる時間、あなたがあなたでいられますように。

でも、これは一〇代のあなたより先に、「挨拶をするみんないい子」などのBヒョウゴをつくる大人たちに言うべきことですね。あなたは無理して知りもしない大人たちに挨拶をする必要はないのではないのでしょうか。

私は挨拶そのものが要らないと言っているわけではありません。自然に出てくる挨拶なら何も言うことはありません。欧米を旅していると、目が合うとお互いににこっとする。なんと気持ちのいいことかといつも思います。でも強制される挨拶だったら、そんな挨拶に優先してなすべきことがある。そう思うのです。

挨拶に優先してあなたがなすべきこと？ そう。それが短歌にうたわれた「⑥」こと。

現在にはにかむことにも、口数の少ないことにも、沈黙にも、なかなかプラスの価値が置かれませんが、さらに一人であることに。⑦TVをつければ、登場する人、登場する人、みんな朝からにぎやかに笑って、しゃべりまくり、コミュニケーション能力こそ現在を生き抜くためには不可欠と、社会のリーダーをCジニする人々は大衆でのたまひ——⑧何がコミュニケーションかの吟味なしに——、独り居の大切さや、黙することの大切さを思う人の声はなかなか若い人たちの耳には届きにくくなっています。

かつて短大に勤務していた時、私は新入生になる年もくる年も、せめてこの短大にいる間だけでも、独り居の時間をたっぷり持つようにと話しましたが、授業が終わると、きまって何人かの学生に廊下でそつと呼び止められ、「⑨ほんとうにひとりでいてもいいんですね」と念を押されました。口数少なく、ひとりでいること。それがますますできにくくなっていることを痛感させられる、とりわけこの十数年でした。

もつとも口数が少ないこと、ひとりでいることは、本来こんなふうにつなげて考えてはいけなかもしれません。口数の少ない人はひとりでいることが多くなりがちだけれど、この二つは直接関係があるわけではない。口数が少なくても、いつもグループの一部になっっている人もいるし、おしゃべりでも、独り居の時間をちゃんと確保している人はいますものね。

ただ、私が気がかりなのは、黙っていたいのに、無理をしても、しゃべらなくてはいけないと考える人が一〇代の人々の中にますます増えているように見えること、内容はどうであれ、しゃべるという行為そのものを価値と考える人々が多くなっているように思われることで、こういう状況のもとでは他者の声に耳を傾けたり（小さな声はなおさら）、自分自身の内なる声に耳を澄ますことはむづかしくなってきたのではないかと感じます。

拙訳『ゲド戦記』（岩波書店）の第一巻「影との戦い」第二章に魔法使いの賢人オジオンが、弟子入りしてきた血気はやる少年ゲドに「聞こうというなら黙っていることだ」と短く諭す場面があります。出会ってから四〇年以上になるこの言葉を、私は今も繰り返して思い出します。

自分自身の内なる声を聞くことができてこそ、他者の気持ちを推し測ることができ、その声に耳を傾けることができると思いますし、自分自身との対話ができてこそ、他者との対話もできると思うのですが。いや、もしかしたら、その逆かもしれません。

が、いずれにしろ、聞こうと思ったら、まず自ら口をつぐまなくてはね。そのためには、やはりひとりになる必要があるように思います。グループの端にくっついていても、できなくはないかもしれないけれど、その場合はかなりの技術がいる。自分を透明人間にする技術とか、道化師にする技術とか。その技術の習得にこれまでどれだけ多くの人たちが四苦八苦し、「⑩」に⑪ミイラ取りのミイラになってしまったことか。

でも、やっぱりひとりになるのはつらい？ ひとりでいるのは恥ずかしい？ ひとりでいるのは負け組のことって思ってしまう？

そういうおまえはどうだったか、ですって？ 私は自ら選んでひとりになろうとしたわけではなかったけれど、中学・高校、い
え大学生になっても、気が付くと、しばしばひとりになっていました。それは誰からも相手にされなかったということかもしれま
せんが、いずれにせよ私は、いじめにあったという感覚も全く持たずに、小学校はもちろん中・高、大学生の日々を過ごしていま
す。さらにその後の日々も。

（『大人になるっておもしろい？』 清水 真砂子）

「注」 *1 のたまひ「おつしやり」の意。

*2 道化師「ピエロ」の意。

問一 空らん「①」と「⑩」には「最後」という意味の同じ慣用表現が入ります。それを平仮名六字で答えなさい。

問二 【否応なく】の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかたなく イ 無理やり ウ 知らないうちに エ 突然に オ あつという間に

問三 ①線②にある「校区一丸の挨拶運動」についてある五人が話し合っています。この中で筆者の考えに近いのはどの人ですか。
次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 君 「この間、ある学校を訪問したら、挨拶運動ということで、会う生徒がみんな大きな声で挨拶してくれたんだ。初めは

おどろいたけど、ああして挨拶してくれるのは気持ちがいいね。」

B さん 「けれど、あの挨拶は『挨拶運動』としておこなっているから、彼らの自分の気持ちから出た挨拶ではないのがちよつ
と残念ね。まあ、素通りされるよりも挨拶があった方がいいけど。」

C 君 「そうだね。そうした挨拶運動の中の挨拶でも続けていけばそれがいつの間にか習慣になっていくし、しつかり挨拶を
すれば地域の人や先生にほめられるからね。」

D さん 「でも、ほめられるから挨拶をすうとかっていうのは、何か本来の挨拶とは違うし、そうした挨拶をされてもどこか機

械的に感じて、素直に入ってこないんじゃないかしら。」

E 君 「そうだよね。どこかせられている感があつて違和感をおぼえるんだよ。どうせやるなら外国の人みたいに笑顔を交
えながらできたなら、よりよい運動になると思うよ。」

ア A 君 イ B さん ウ C 君 エ D さん オ E 君

問四 ①線③「ああ、いらしてください」とありますが、どのような人がいたのですか。それを示す部分を「人」につ
ながるように本文中から三十五字以内で探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出さない。

問五 ①線④「やっぱり嬉しい」と筆者が感じるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 本当は実際にこの歌を詠んだ人に会いたかったけれど、歌への共感が現実はこの人と会っているかのような気分を味わわ
せてくれたから。

イ 本当は自分が中学生の時にこの歌を知りたかったが、今の世にもこうした考えの大人がいることで、思春期の若者が救わ
れるように感じたから。

ウ 本当は自分が思春期だった時にこの歌から安心感をもらいたかったけれど、今現在自分と同じ思いを抱く人がいることを
知ったから。

エ 本当は自分がこうした歌を中学生たちに歌ってあげたかったが、自分の思いを代弁してくれる人が自分以外にもいるとわ
かり心強かったから。

オ 本当は自分の中学生時代にこの歌に出会っていたかったが、実際にこうした歌を詠む大人が自分の学生時代にもいたこと
が分かって安心したから。

問六 ―線⑤「その人」とはどういう人のことですか。最も適当なものを次のア・オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来自分が何をしたいのかということを見出し行動できる人

イ 自分が置かれている状況を冷静に判断して行動しようとしている人

ウ 周囲に左右されずに自分の習慣ののっとって行動できる人

エ 相手が自分に求めていることを考え、それに合わせて行動できる人

オ 自分自身の思いや感情に素直に行動しようとしている人

問七 空らん「⑥」に入る語を本文中から二字で答えなさい。

問八 ―線⑦「TV」とありますが、筆者は「TV」がどのような考えの人を生み出したと考えていますか。それを示す部分を三十五字以内で二つ探し、それぞれ最初の三字を抜き出さない。

問九 ―線⑨「ほんとうにひとりでもいいんですよね」とありますが、学生たちはなぜこのような問いかけをするのですか。

その理由として最も適当なものを次のア・オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲との笑い合いや語り合いに価値をおく社会の中で、一人で行うことは周囲の人よりも劣っているとされ、冷たい目に向けられるにちがいないと不安をおぼえるから。

イ 周囲との語らいが何より大切だとされている社会の中で、沈黙を守り一人で行おうと思っても、はたしてそれを実践していくことができるのか疑問に思ったから。

ウ 周囲の人々の中に無理に調和することを求める社会の中で、あえて人々の輪に入る必要はなく、一人でもいいのだということを確認し、安心したかったから。

エ 周囲との円滑な会話や談笑なしには生きにくい社会の中で、一人で行うと誰の目にも留めてもらえず、本当に孤独な人生を歩むことになるのではないかと心配になるから。

オ 周囲の人々と無理をしても話さねばならない社会の中で、一人で行いたい時には一人で行うことも許されるのだと言ってもらえたことで、安心感を抱いたから。

問十 ―線⑪「ミイラ取りのミイラになってしまった」とありますが、ここではどのような状況をこのように述べているのですか。最も適当なものを次のア・オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア グループの中にも自分を保とうと思っていながら、結局そのグループと同化してしまうこと。

イ グループの中にも自分が中心でいようと思っていながら、結局その中に取り込まれてしまうこと。

ウ グループの中にも自分の考えを主張しようと思っていながら、結局皆に合わせられてしまうこと。

エ グループの中にも周囲と距離を置こうと思っていながら、結局自分から話しかけてしまうこと。

オ グループの中にも周囲を冷静に観察していこうと思っていながら、結局自分が観察されてしまうこと。

問十一 ―線⑧「何がコミュニケーションかの吟味なしに」とありますが、筆者の考えるコミュニケーションとはどのようにして成り立つのですか。「〜」と成り立つ」につながるように五十五字以内で説明しなさい。

問十二 ―線A「セ」・B「ヒョウゴ」・C「ジニン」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいいにはっきりと書くこと。)

〔二〕 次の文章は昭和十年ごろに書かれた、女学生を主人公とした作品です。これを読んで、後の一から八の各問いに答えなさい。
(字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

私は、その晩、いつも聞いたことのない、ラジオの天気予報に耳を澄ました。
明日雨か天気か？

まるで遠足の前夜のように、気になった。

お床の中へ入ってから、幾度も自然と眼がさめた。

(明日はたのしきずる休み……)

どこかで、耳の傍で侏儒が妙な声で唄っているようだった。

生れて初めてする、悪い秘密な罪悪！

考えると胸がおどる。

小さい娘が、そんな計画を明日お友達と実行しようと思ってるなぞ、夢にも知らないで、きびしいお父様もお母様も誰も彼も寝ているのだと思うと、①空恐ろしい、息の詰る気持で、昂奮して眼が冴えて、なかなか寝つかれず、何度も寝返りをした。

朝から陽がキラキラと照っている。

いつものように、登校の準備、その支度して、

「行って参りませう」

を、お母様に言った時、私は少し自分の声が、いつもより違ってやしないと、ひやりとした。けれども、お母様は、いつものように、

「はい、行ってらっしゃい」

とおっしゃって、すごいそがしげに、お台所の方へ入っていらつした。

「万歳！」

と、なんとなしに、(ずる休み)の門出に、景気をつけて、グングン私は門を出た。

道では、人々が皆前こごみに、急いで歩き、ついさっき呑み込んだ、朝のおみおつけだの、あるいは紅茶だのの匂いがまだ口に残っているように、歩いてゆく――

電車は満員、いつものように、押し合い、へし合い、誰も遅刻は御免という顔だった。

(私はずる休み！)その中で、私一人が、誰とも違うこの一つの冒険をしに、今朝は出るのだと思うと、いつもより十倍も緊張していた。

(ずる休み)それは、確かに新鮮な一つの刺激と戦慄を味わう気持だった。

思えば、学校へきちんと毎朝、慌ててガツガツ通うなんて、なんて平凡な単調なことだったのか――

私は、その満員の電車の同じ車室の中に、誰れも、同じ学校の人たちがいないのを確かめた、外の電車にはいるかも知れない、でも誰れも、気をつけもしないだろう、途中の駅に、おしあい、へしあう出入口から、こぼれたように、一人の少女が降りて、ポー、ガタン、電車は混雑するホームに私を取り残して、そのまま、出て行く。

私は、すぐ、あの階段を下へ降りてしまふ――

②誰れも気がつきはしない！

(中略)

二人は駅から戸山ヶ原の方向を辿り始めた。

犬も人も車も、朝の太陽の下で、何か今日の目的へ皆走るように慌ただしい。

「私もう、生れた時から、学校へ通い続け通しのような気がするわ、だから、たまに一度ずる休みしたってねえ」

私は自己弁解をするように言った。

生れてすぐ学校へあがつたわけではないけれど、なんとなく、そんな気がしたのだ。

「そうよ、女学校も入学した初めは、珍しかったけれど、二年の今頃になると、③そろそろ倦怠期ね」
赤木さんが、なかなかおなまを言った。

「ほんとよ——」

私は一日や二日、いくらずる休みしたって、試験の時、困らない自信があった。

毎日せつせと、『あくせく』、忠実に学校へいくら通ったって、出来ない人はやっぱり出来ないんだもの——と思った。
戸山ヶ原に着いた。

いつも見たように、たくさんの人影はなかった。そして、電車の窓から見ると芝生のような青草の原も近くへ寄つてみると赤土の禿げがあつて、すぐ坐つたり、ねころんだりするのに丁度好い場所はなかなかなかった。そして紙屑や、新聞紙が風に吹かれていた。

その木立の青草の上に、やっと、二人は少し疲れて足を投げ出した。

「今日はさびしいほど、人がいないのね」

と言うと、赤木さんは、

「だって、日曜じゃないんだもの」

そう言われると、ああそうだ、今日は誰も彼も、学校にお勤め先に、皆行っているのだ。

空には、ぽかりと青空に、白い雲が浮いていた。

「これ召し上げれ」

と、赤木さんが、鞆の中に忍ばせて来たチョコレートを掌に取り出した。

私は腕時計を見た。もう学校はとづくに始まっている時刻だった。

「みんな今、お裁縫してるのよ」

と言うと、

「④みんな莫迦ね」

と、赤木さんが、チョコレートを一口に放り込み、その銀紙で可愛いコップを指先でつくっていた。

私もチョコレートを口に入れて、赤木さんの真似をして銀紙のコップをつくった。

そうして幾つかの、銀紙のコップが出来た時、もうだいぶ時間は経っていた。

「あつ——一寸、あれ相澤先生じゃない？」

赤木さんが、私の肩をつついた。

見ると、原っぱの向うから、洋装の背の高い女のひとが、こっちへ歩いて来る。

それは学校の相澤先生に、そっくりだった。

（ずる休み露見！）

私の心臓はびったり止まった。

「どうして、ここに遊んでいること、わかつたんでしょ」

赤木さんが、まわりにならべてあつた、銀紙のコップをいそいで、手で掻き集め、くちやくちやにして、かくしてしまった。

その女のひとは、近づいて来た。

私たちは、鞆を持って蒼ざめて立ち上がった。

だが、一歩一歩近寄るにつけ、

「あつ、ちがう！」

と私たちは叫んだ。

それは、相澤先生ではない、外の女のひとだった。

でも、その女のひとは通りすがり、その丘の上の二人の制服の少女を見て、瞬間、不思議な表情をし、次に一種の呆れた軽蔑感を含んだ眼を向け、口許に冷笑を含んで、行き過ぎたようだった。

⑤私は、まだあんな視線を路傍で、他人から受けたことはなかった。

(不良少女!) あの見知らぬ行きずりの女のひとの眼は無言のうちに、そう言っているようだった。

(中略)

「こんなことなら、やっぱり大胆でも浅草へ行けばよかったのね、何か見ているうちに、一日すぐ経つわよ」

赤木さんが残念そうに言ったが、私にはもともと、そんな大胆さはなかったし、ただ(ずる休み)そのものに、好奇心と夢をかけていたのだから……

だが、その憧れの(ずる休み)を、いよいよ今日実行し味わって見て、それが想像したように、幸福でもなく楽しくもないのに、私が吃驚した。

そればかりか、心臓はどこか重くなってゆくのである。仰いだ大空も、林も赤土の原っぱも、今日の私には、⑥なんともさびしい天地の風景であろう——私は何か放逐された少女のような、もの悲しい気にさえ、だんだんやって来た。

私は無口になった。黙りこくって、元氣なく歩いた。あてもなくさまよう、飼主のない小犬のように……

「私疲れちゃった!」

赤木さんが、やがて一言かなしげに、つまんなげに口を利いただけ——それほど二人は黙りこくっていた。

いつの間にか二人は原っぱを横切り、見知らぬような郊外めいたところへ出て行った。

その坂の上に、小学校の校舎が高く聳えて見えるのだった。

その二階の教室の開放された窓には、幾つもの小さい頭が行儀よく、ならんで見えて、先生の声が聞こえた——

私たち二人は立ち止まって、その校舎の窓を仰いだ——そして、すぐ二人とも、自分の学校の今日の教室を連想した。

ああ、地理、英語、国語——今日の課目を、ああして同級の人たちは習っていたのだ。

どんなことを、先生が今日話し、教えられたか——永久に今日の教室のことを、私と赤木さんは知ることが出来ないのだ。今日の課目の時間は、二度と返らないのだ——今日の教室で、どんな大事な話や面白いことがあったとしても、私は生涯それをも一度しては貰えないのだ——

私たち二人の知らないことを教えられないことを、同じ級の人には知ったり聞いたりしてしまったのだ——

級の中で、私が馬鹿にしていたような人だって、今日だけは私より賢くなり、新しい知識を得た人なのだ! そう思う心が、雲のように、だんだん私の心に湧くと、私は悲しさで胸がいっぱいになった。

「学校へ! 学校へ帰りましょうよ!」と、いきなり赤木さんの肩をゆすぶった。

「まあ、今から——駄目よ!」赤木さんは、呆れて私を見つめた。その私の眼には、白い涙がいつの間にか浮かんでいたのだった。(ずる休み)に、こんなに烈しく幻滅した子の儚い涙が……

(『女の子』 吉屋 信子)

〔注〕 *1 前こごみ前かがみのこと。

*3 おなま大人ぶっている様子。

*2 おみおつけみそ汁のこと。
*4 放逐放り出すこと。

問一 【あくせく】の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 飽きることなく イ 嫌になることなく ウ ゆるぎなく エ 困ることなく オ 落ち着きなく

問二 ―線①「空恐ろしい、息の詰る氣持」とありますが、その氣持の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何でもできる自慢の娘が、「ずる休み」という悪事を働くことを知らずに寝ている両親に対し罪惡感を抱き、楽しみにしていた計画をやめるべきか悩んでいる。

イ 父や母が私のひそかな計画を知り、楽しみにしていた「ずる休み」が実行できないうえに、両親や学校の先生に怒られてしまうかもしれないことを心配している。

ウ 両親も女学校の先生や友人も想像できないような「罪惡」を友達と計画できて満足し、それを実行することができるのは自分たちだけだと自負している。

エ 厳しい両親の期待を裏切るような「罪惡」を実行しようとする自分を恥じながらも、誰にも知られずに計画を立てることができたことに満足している。

オ 誰も想像もしていない、世界中で二人だけが知っている「罪惡」が成功するかわからない不安を抱きながらも、新しい世界を知ることが期待している。

問三 ―線②「誰れも氣が付きはしない！」とありますが、そのように私が思った理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私は昨晩から計画がばれないよう細心の注意を払ってきた上に、皆は毎日同じことを繰り返すことだけに一生懸命になっており、ずる休みをする者がいるとは考えてもいないから。

イ 朝、家を出るときにいつもと声が違っていたことに両親が気づかなかった上に、道を行きかう人たちは皆前こごみに急いで歩いており、他人に対して興味などあるはずがないから。

ウ 初めて味わう刺戟と戦慄から、私も赤木さんも慎重に行動をした上に、ホームは学校や会社に行く人で大変な混雑を見せ、

人々が他人を見ている余裕もないような状況だったから。

エ 家から目的地の駅に着くまで、私は学校に行くように振舞ってきた上に、周囲の人々は自分たちが遅刻しないように移動することに氣をとられ周囲のことなど氣にもしていないから。

オ 赤木さんと何度も打ち合わせをしたため、計画が知られることはない自信があった上に、私が乗った満員の電車にも外の電車の中にも同じ学校の人たちがいないことを確かめたから。

問四 ―線③「そろそろ倦怠期ね」とありますが、赤木さんは何に対して倦怠感を抱いているのでしょうか。「うこと」につながるように本文中から二十字程度で探し、最初の五字を抜き出ささい。

問五 ―線④「みんな莫迦ね」とありますが、赤木さんはどのような点を「莫迦」だと考えているのでしょうか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お裁縫という自分たちの将来に必要なものに対し何の疑問も抱かず、同じ学校の人や先生の言うことをただ聞いて真面目に授業を受けている点。

イ 当たり前のように学校へ行き、授業を受けるといふ何の変化もない日常に対し、何の疑問も抱かず同じ学校の友人たちが授業を受けている点。

ウ 一度くらいずる休みをしても試験の成績に何の影響もないのに、それに気づかず、いつか私たちのような優等生になれると友人たちが考えている点。

エ みんなが毎日忠実に学校へ行くことだけが正しいと考え、努力しても出来ない人は出来ないということに気づきもせず、一生懸命お裁縫をしている点。

オ 教室で授業を受けている友人たちも、普段、ずる休みをしたいと思っっているはずなのに、実行する勇氣もなく真面目に学校へ通っている点。

問六 ―線⑤「私は、まだあんな視線を路傍で、他人から受けたことはなかった」とありますが、この時の私の心情として最も適当なものをア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 優等生であった私は他人から批判されるようなことをしたことはなく、気軽な気持ちで行ったずる休みにより、自分たちが他人から軽蔑される対象になったことに対する絶望感。

イ 路傍で女の人から軽蔑の眼差しを向けられたことにより、私が友人より勉強ができるなどということは狭い女学校という世界から出てしまえば、何も意味がないというあきらめ。

ウ 同じことを繰り返す日常を抜け出した自分たちは特別な存在だと感じていたが、軽蔑の眼差しを向けられ、女学校や家という限られた世界だけで物事を考えていたことに対する衝撃。

エ 普段の女学校での自分たちの様子を何も知らない、ずる休みをしている途中に道でたまたま出会っただけの見知らぬ行きずりの女の人に、不良少女と見なされたことに対する不満。

オ 人生で初めて路傍で軽蔑のまなざしを向けられ、自分たちが世間知らずのただの少女であることに気づくと共に、大人になるとこのような経験を何度もするのだろうという悲しみ。

問七 ―線⑥「なんとものさびしい天地の風景であろう」とありますが、この私の心情と対照的な心情を示す風景描写を本文中から一文で探し、最初の三字を抜き出さない。

問八 「私」は「ずる休み」を通し、日々の生活についてどのようなことを学んだのでしょうか。「〴〵を学んだ」につながるようにわかりやすく六十五字以内で説明しなさい。

豊島岡女子学園中学校入学試験

國語解答用紙（一回）

※のらんには記入しないこと

氏名

得点

氏名

得点	※
----	---

問一

問二

問三	
問四	
	3
人	

人

問五	
問六	
問七	

問九
問十

問八						
----	--	--	--	--	--	--

[illegible]

問十二
A
め
B
C

ことで成り立つ。

1	2
---	---

問二	
問三	
問四	

問五	
問六	
問七	

[illegible]